本棚

石城謙吉　著

『森林と人間
―ある都市近郊林の物語』

この森林関係の本を読んで大変感銘し，農林関係者だけでなく，地域再生を願っている人々，さらに一般市民にも広く読んでもらいたいと感じた。

著者は北大の苫小牧演習林の「林長」として23年間，荒廃していた演習林を苫小牧市民の理解と協力を背景に面目を一新して再建した経緯を書いている。

著者は林学の専門家ではなく北大農学部では動物生態学を専攻し，『イワナの謎を追う』(岩波新書)などの著書もある森林・林学は素人であった。それがかえって，わが国の明治以降輸入された木材生産志向のドイツ林学から自由で，自分自身の頭でわが国の森林・林業の在り方を模索しやすかったのかもしれない。自ら手を挙げて苫小牧演習林長になって再生を目指した。それまで基本方針としてうけつがれてきた木材生産のための針葉樹への林種転換をやめ，在来の広葉樹主体の森林を再建することとし，地域の人々と森林との結びつきを再現して人と自然を結びつけた「共生林」を目標にしたこと。苫小牧市民の休養の場としての森と自然研究・教育の場としての森林をつくっていった。これまでの大学の演習林では考えられなかったことである。

予算や職員定員など大学や文部科学省からの制約の多い大学演習林で，苫小牧演習林の職員たちの自発的な創意工夫と市民の協力で演習林が生まれ変わっていく様子は感動的である。その中で著者の専門動物生態学の知識が生かされていく。林内の水源から流れ出て林内を５キロも流れ苫小牧市街から港に流れ込んでいる幌内川を甦らせ，治水対策として池を掘り，水棲動物や水鳥を誘致して遊園地として市民に開放した話は読んでいて楽しく，また勇気づけられる。

23年間やってきたいろいろな事例がわが国の里山問題・森林・林業問題の解決に多くのヒントを与えてくれる。都市近郊林だけの話ではない。まさにその地域の気候や風土に即して森と地域の人々との関係をどのように創っていくかという息の長い仕事である。わが国の広い林野からみて，地域再生の鍵がここにあるのではないか。

市町村林など公有林はもちろん私有林にも有益なヒントが多く含まれている。著者の一生のすばらしい物語である。

――岩波書店　2008年12月

735円(税込) 213頁――

((株)農林中金総合研究所 元副社長

荒井淨二・あらいじょうじ)

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。